虫ぼし抄

# ロシア建築美術週報
## ―人工都市の総目録

近　藤　昌　夫

### 1. 資料概要

「建築美術週報」は、ロシア帝政末期にサンクト・ペテルブルク（以下ペテルブルク）で刊行された、予約購読制の学術雑誌である[1)]。寸法は35.2×25.6でほぼB4サイズ。編集発行は建築家・美術家協会。1914年4月の刊行以来、1917年11月に第35号で終刊するまで、合併号もあるが、毎年度52冊刊行されている（本資料は1914年第5号、第6号が欠落）。創刊号の購読案内を見ると、「表紙、広告を除き12頁」とあるが、時に4頁や16頁の通常号もある。

内容は以下の通り。

1. 建築及び関連する美術の芸術的・技術的諸問題を対象とした論文（図版併載）、2. 建築家・美術家協会の活動や会議の報告、3. 国内外の図版付き建築・美術雑報、4. 帝立美術アカデミーの活動報告、5. 政府・市・地方自治体その他公共機関の建築関連事業の案内、6. 美術および技術関連組織の活動報告、7. 批評、8. 国内外の関連出版物の紹介、9. 建築家・美術家協会他、内外の各種コンペ情報（応募要領、審査結果）、10. 政府行政機関の関連する政令、法令（建築基準法、各種入札・契約制度）等の通知、11. 読者通信欄。

以上のように、建築物それ自体に対象を絞らず、コンプライアンスやガバナンスまで視野に入れた「建築美術週報」は、包括性・網羅性・実用性を特徴としている。

### 2. 建築家・美術家協会と本誌の刊行まで

編集刊行母体である建築家・美術家協会は、帝立美術アカデミー（現国立レーピン絵画彫刻建築大学）内にオフィスを構えていた。

協会は、美術アカデミーの教授及び卒業生らが発起人となって、1903年10月15日に発足した。趣旨は卒業生への仕事の斡旋だった。

中心人物はアカデミー教授P.Y.スューザル。代表作のひとつに、ネフスキー大通りに面し、現在「本の家」として知られるシンガー社社屋がある。その他発起人に、L.N.ベヌア、A.A.グルーベ、N.コズロフ、G.I.コトフ、B.N.ニコラーエフ、A.N.ポメランンツェフ、M.T.プレオブラジェンスキー、V.P.ツェイデレル等、当時第一線で活躍していた建築家が名を連ねている。

たとえばL.N.ベヌアは、古典主義、ネオ・ロシア様式、バロック様式、折衷主義、アール・ヌーヴォーと、短期間にめまぐるしく様式を変えた建築家だが、個性の乏しさが指摘されるものの、高度な技能を身につけた指導者として多くの弟子を育成し、帝政末期からソビエト時代の建築界に寄与した。門下には、ネオ・ロシア様式のA.シューセフ（代表作、トレチャコフ美術館新館）、ネオ・ロシア様式から構成主義に転じて活躍したV.シューコ（同、レーニン図書館）、北方モダン様式のF.リドヴァリ（同、アストリア・ホテル）、ネオ・ルネサンス様式のM.ペレチャトコーヴィチ（同、通商産業省）等がいる[2)]。

かれらが得意とした様式の多様性から、「建築美術週報」の刊行期間が、世紀末から20世紀初頭にかけて、たとえばV.カシコーフのネオ・ビザンツ様式が浸透し、構成主義等新たな前衛的様式が開花しはじめる、胎動の時代と重なっていることがわかる。トルケスタン地方の考古学論文の連載もプリミティヴィズムの流行と無関係ではないだろう。

そもそも職業斡旋を目的にはじまった協会の活動は、建築を中心とした学問的研究及び美術との学際的研究、実践的土木関連情報の提供等、様々な成果の蓄積が進むにつれて文化財保護へと拡張し、建築家・美術家協会はロシア初の建築遺産保護団体となった。

具体的仕事内容は、主としてペテルブルクの18–19世紀の歴史的建築物・記念碑の調査研究と保護で

ある。当時すでに多くの建物が、老朽化や火災により撤去あるいは改築の対象になっていた。協会は過去の貴重な建物の姿を、文化遺産として図面や写真とともに記録しようと考えたのである。

直ちに歴史的記念碑研究・記録専門委員会、「旧き博物館」委員会、歴史建築展覧会委員会が設置され、対象となる建物の測量が開始された。測量範囲は、1905-1907年にかけ、市内から郊外のガッチナやパーヴロフスクにも及んだ。

そして1907年、協会は「旧きペテルブルク」の調査研究及び記録を進める委員会を新たに発足させた。

記録方法を図面から写真撮影に転換することで、ペテルブルクの建築記念物の調査研究、記録、保存が迅速化し、資料の蓄積も一段と進んだ。

この活動によって1909年、「ペテルブルク歴史博物館」が創設され、ピョートル大帝時代の草創期ペテルブルクから同時代に至るあらゆる資料が記録保存されることとなった。建物全体の写真はもちろんのこと、家具調度類、食器、彫像、格子、ファサードの装飾、設計図、ドア、手すり、門扉、さらには絵画作品、版画、塑像等も保存・記録の対象となった。

収蔵物の増加に伴い、博物館が協会の分室として自立する。

協会は広報・啓蒙活動を開始。その一環として「建築家・美術家協会年報」(1906-1916)と、この「建築美術週報」(1914-1917)が刊行されたのである[3)]。

建築家・美術家協会は創刊号につぎのような刊行の辞を寄せている。

> 建築家・美術家協会は、ここに週刊学術誌「建築美術週報」を刊行する。「建築美術週報」は、協会の活動を反映させながら、現代建築の現場を隈無く解明することになるだろう。
>
> 本協会は団体の利益を優先するものではない。協会の仕事は、アートの広範な領域を対象とし、多少なりとも建築に携わる者すべてに関与するものである。この十年間、本協会は、建築及び美術の諸問題を対象にして事業プログラムを徐々に拡張してきた。そしてその成果――美術と科学の体系的研究、現代のアートな生活に直接コンタクトしようという姿勢、美的生活の諸現象の考察と評価、絶えず発生する諸問題の精査、現実的課題の解決――が、本誌の一刻も早い出版を促したのである。
>
> 雑誌の使命は、考古学、歴史学及び芸術哲学論文、建築土木論文、国家・社会・個人建造物の論文の掲載だが、それらは日常生活における建築上の出来事の記録である。一般的テーマの論文はもとより、一個の建築士に必要な実用的情報、文献、参考資料、実生活に密着した建築関連知識等も、この週報に満載されることになろう。
>
> 新雑誌の創刊にあたり、建築家・美術家協会は、この仕事がより多くの読者の資産になること、読者の芸術的志向を支援する新たな力になることを願うものである。

この度蔵書となった「建築美術週報」は合本4分冊で(第1巻[1914-1915]、第2巻[1915]、第3巻[1916]、第4巻[1917])、それぞれに目次がついている。たとえば第1巻の目次は以下の通り。

[歴史と考古学の問題]、[美術の諸問題]、[技術の諸問題]、[その他の諸問題]、[現代の建築とプロジェクト]、[記念碑・彫刻]、[都市環境整備]、[病院、衛生及び保養関連事業]、[協会の活動]、[コンペティション]、[展覧会・協会の活動]、[追悼]、[関連文献]、[読者より]、[雑報]。

協会の趣旨を最も反映する項目[歴史と考古学の問題]には、たとえばレブロン、クワレンギら往年の巨匠を取りあげた作家論や、トヴェーリからツァリーツィンに到る教会建築の調査研究報告、木造農家、遺跡調査等考古学的考察、火災による石造建物の被害調査報告、墓地の管理保全、各地の教会の修復調査等が掲載されているほか、協会設立趣旨を反映して、卒業制作も公表されている。

記述対象となる用途別建築物は、公衆トイレ、温室、庭園、スタジアム、集合住宅、個人住宅、木造農家、街灯、公園、教会、オベリスク、銀行建物、劇場、コンサートホール等、実に様々である。

地域もペテルブルクに限定せず、モスクワの赤の広場にあるポクロフスキー大聖堂(聖ワシーリィ寺院)の修復や海外の建築も随時取りあげられている。

ペテルブルクに建築家・美術家協会が設立され、「建築美術週報」が刊行されたのは、ペテルブルクが単にロマノフ王朝の帝都だったからではない。遺産保存という意識は、ペテルブルクという都市それ自体の要請といっても過言ではないのである。

以下に世界文化遺産に登録されているこの街の成り立ちと特徴を、本誌の記事にも簡単に触れながら

かいつまんで紹介しよう。

### 3. 人工都市ペテルブルク

ペテルブルクは、250年に及ぶモンゴル支配の影響を引きずるモスクワから脱却し、ロシアを西欧化するために、ピョートル大帝が、18世紀初頭に荒涼たる沼沢地に造った人工都市である。バルト海経由でヨーロッパへ出る「窓」をうがつため、内陸部のモスクワと結ぶ重商主義の要衝が必要になった。

アジア的なモスクワ・ロシアを思わせるものは極力排除し、「ヨーロッパよりヨーロッパ的な都市」の建設をゼロから目指したのである。

一連の設計に携わったのはヨーロッパ各地で活躍していた建築家たちだった。

イタリアで建築を学んだスイス人D. トレジーニは、ペトロ・パーヴロフスク聖堂やピョートル大帝の夏宮殿等を設計し、ドイツ、オランダ風にアレンジしたイタリア・バロック様式をペテルブルグにもたらした。ドイツ人建築家A. シリューテルはキーキン宮殿によって、G. マタルノービはクンストカーメラによってドイツ・バロックをもたらした。イタリア人のN. ミケッティはローマ・バロックを、また、ドレスデンで活躍していたG. キヤヴェリはサクソン・バロックを帝都にもたらした。ワシーリィ島を首都にする奇抜なアイデアをピョートル大帝に進言したフランス人J. レブロンの仕事については、V. クルバートフが「レブロンの理論的仕事」（1914年、第20号及び第21号）で庭園設計を例に、その特徴を明らかにしている。

こうして、ネヴァ河口の沼地にローマとヴェルサイユが放り込まれ、攪拌されると、アムステルダムにもヴェネツィアにもどこか似ていてどこか違う、奇妙なヨーロッパ風の町が徐々に姿をあらわしはじめたのだった。

ピョートルの時代にはまだ街並みと呼べる統一感はなかった。ペテルブルグが、古代ローマを向こうに回したオアシス都市に喩えられ、「北のパルミラ」と呼ばれるようになるのは、大帝の遺志を継いだ女帝たちの時代を待たなくてはならなかった。

女帝たちの持ち前の美的センスが存分に発揮され、ペテルブルグは華麗で知的に、と同時に荘厳にその装いを整え、西欧近代都市の名に相応しい、気品ある均整のとれた帝都に成長していったのである。

イワン5世の娘で、ピョートル大帝の姪にあたるアンナが、嫁ぎ先のクールラント（ラトビア西部）から呼び寄せられ、帝位に就くと、帝都の組織的開発がはじまった。

1736年と翌37年の二度の大火をきっかけに、女帝は「サンクト・ペテルブルグ建設委員会」を設置。委員会は海軍省周辺を中心とした都市改造計画を立案した。中心となったのが、ピョートル大帝の時代にイタリアに留学した建築家P. エロープキンだった。街の開発・整備は急速に進み、「ネプチューンの三又の槍」と呼ばれ、現在もこの街に個性的な表情を与えている三本の幹線道路――ネフスキー大通り、ヴォズネセンスキー大通り、中央通り（現ゴロホヴァヤ通り）――が完成したほか、それら幹線道路と交差するサドーワヤ通りが敷設され、ポクロフスカヤ広場とセンナヤ広場が造られた。モイカ川とグリボエードフ運河の堤防整備もアンナ女帝の時代に着手された。

アンナの死後、クーデターによって帝位に就いたピョートルの実の娘エリザヴェータは、宮廷をヴェルサイユに匹敵する文化とファッションの中心にしようと考えた。エリザヴェータ時代に活躍した建築家は、「宮殿アンサンブルの巨匠」とうたわれたF. ラストレリである。

ラストレリは、女帝の父が好んだバロック様式を、さらに壮麗で晴れがましいエリザヴェータ・バロックとして開花させた。代表作にスモーリヌィ女子修道院、ストロガノフ宮殿、エカチェリーナ宮殿、そして冬宮（エルミタージュ美術館）等がある。とりわけ室内装飾が見事で、その特徴はエルミタージュ美術館の大使の階段によくあらわれているが、空間に「動き、きらめき、振動が満ちている」（B. ヴィッペル）。

この時代、ラストレリに次ぐ仕事を残したのがロシア人建築家S. チェヴァキンスキーである。新オランダの木材倉庫、聖ニコライ神現聖堂等を手がけた。そのほか、ヨーロッパの建築術を習得して活躍しはじめたロシア人建築家に、海軍省を造ったI. コロボフや夏の庭園の造園に参加したM. ゼムツォフ等がいる。

次のエカチェリーナ2世は、その後34年にわたり国政に辣腕を振るった。女帝でただひとりの大帝である。

百科全書派と親交のあった啓蒙専制君主エカチェリーナは、エリザヴェータとは対照的に地味な線を好み、1762年に設置された「ペテルブルグ・モスク

ワ石造建築検討委員会」に古典主義への回帰を命じ、堅牢・功利性・美の三つを兼ね備えた都市開発を方針とした。

それを受けてK.ロッシが冬宮の北ファサードに花崗岩の宮殿河岸通りを敷設した。また、3本の水路――エカチェリーナ（現グリボエードフ）運河、モイカ川、フォンタンカ川――の河岸通りが整備され、運河壁と運河沿いの建物のバルコニーの直線、船着き場に降りる階段の曲線、石橋のフォルムが、建物と落ち着いた調和を見せるようになり、街全体に見事な統一感がうまれた。

このように、ペテルブルグの都市建設は18世紀後半になって巨大公共建築物と宮殿の建造を継続しつつ街全体の景観に配慮するようになったのである。

女帝はフランス人のV.デラモートやイタリア人のA.リナルディ、スコットランド出身のC.キャメロンを徴用し、小エルミタージュ（V.デラモート）、後に「建築家・美術家協会」が設置されることになる美術アカデミー（A.ココーリノフ、V.デラモート）、タヴリーダ宮殿（I.スタローフ）、大理石宮殿（A.リナルディ）等を次々と建設し、橋や花崗岩の河岸通りを整備することで帝都の美しさに磨きをかけた。

エカチェリーナ亡き後、皇帝たちの時代がやってくる。

エカチェリーナの息子で狂王といわれたパーヴェルは、エカチェリーナ2世から授けられた領地ガッチナで、プロイセン流の兵隊遊びにふける気儘な皇帝だった。いつしか私設軍隊の駐屯地のようになったガッチナの生活がそっくりペテルブルグに持ち込まれ、近衛兵詰所や遮断機がエカチェリーナのペテルブルグを陰に押しやり、街の様相を軍の駐屯地のように変えていった。パーヴェルが造らせたミハイル城（V.ブレンナ）は、かつて要塞があった場所に建造され、巨大な二本のオベリスクには戦勝記念トロフィが飾られている。

アレクサンドル1世の初期は、祖母エカチェリーナ女帝が愛した古典主義が主流で、クワァレンギが近衛騎兵馬場（現中央展示ホール）、スモーリヌィ学校を設計した。

クワレンギは、エカチェリーナ女帝に招聘されたイギリス人建築家で、女帝の時代にはエルミタージュ劇場やゴスチーヌィ・ドヴォールを設計しているが、本誌ではV.クルバートフが「クワレンギ晩年の作品」（1914年、第29号）でアレクサンドル1世時代の仕事を紹介している。

時代の花形は壮麗な統一感を誇る巨大公共建築物で、A.ヴォロニーヒンのペテルブルグ鉱山大学やカザン聖堂、フランス人J.トマ・デュ・トモンによるワシーリィ島岬のストレルカ（砂嘴）が当時の雰囲気を今に伝えている。

巨匠トマ・デュ・トモンの仕事については、E.バウムガルテンがその全体像を「トマ・デュ・トモン」（1914年、第7号）で明らかにしている。現在サンクト・ペテルブルク音楽院のある場所に建っていた、代表作のひとつボリショイ劇場の調査報告は貴重な成果のひとつである。［図1］ボリショイ劇場は、マリインスキー劇場とともに、船員と外国人の居住区だったコロムナ地区を芸術のメッカに転換する大きなきっかけとなる象徴的建物となった。

アレクサンドル1世の晩年とニコライ1世の治世に活躍したのは、アンピール（皇帝）様式を得意とするK.ロッシである。ロッシの発案によって、天使像を戴くアレクサンドル円柱（O.モンフェラン）の周囲を、旧参謀本部、冬宮、そして近衛連隊本部（A.ブリュローフ）がゆったりと包み込む重厚な宮殿広場が建設され、威風堂々とした新たな中心が帝都に誕生した。

1820-30年代にはロシア人建築家V.スターソフが活躍した。パヴロフスキー連隊近衛兵宿舎はマルス広場に威厳を与え、聖三位一体教会と救世主変容教会は巨大建築物のアンサンブルをなし、街の中心に欠かせないアクセントとなった。

ニコライ1世のこれ見よがしの壮麗さと晴れがましさは、宮殿広場の近衛学校（A.ブリュローフ）、イサーク広場のマリインスキー宮殿（A.シタケンシュナイダー）、新エルミタージュ（L・フォン・クレンツェ）等にあらわれている。ネオバロック風の

図1

ベロセルスキー・ベロゼールスキー公爵宮殿（A. シタケンシュナイダー）、ネオルネッサンス様式のモスクワ駅（K. トン）等に見られるように、様式の芸術的傾向あるいは装飾性が強まったことがこの時代の特徴である。

アレクサンドル2世とアレクサンドル3世の時代の建築は、懐古趣味とナショナリズムを特徴としている。19世紀後半になると、人口増加、産業の振興、鉄道等の大量輸送手段の普及によって、都市開発は工場建設とともに郊外へと広がった。

いまやロンドン、パリ、ベルリンに次ぐヨーロッパ第4の大都市に成長した百万都市ペテルブルグにとって「西欧」もまた変容してゆく。

先進的文明を象徴し、国力を誇示するモニュメンタルな大型西欧建築が女帝時代の「西欧」であったとすれば、「西欧」が日常化した皇帝たちの時代には、駅、劇場、銀行、百貨店、博物館等の公共建築に「西欧」が浸透していった。つまり憧憬だった「西欧」が、デザインや装飾として日々の暮らしに溶け込み、あるいは流通や産業構造、交通等のインフラとして近代都市の共通基盤に広く根を張ったのである。

こうして「西欧」が日常化すると、今度はナショナリズムの涵養に意識が向けられるようになる。建築は「ロシア様式」を模索しはじめ、国立歴史博物館、トレチャコフ美術館等、ネオ・ロシア様式の建物が古都モスクワに建てられるようになる。そうしたなか、ペテルブルグに建立されたのがスパース・ナ・クラヴィー（血の救世主教会）と呼ばれるキリスト復活聖堂（I. マカロフ、A. パルランド）だった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて建造されたこの教会は、モスクワの赤の広場にある聖ワシリー寺院（濠の上のポクロフスキー大聖堂）のコピーである。教会は、外観が中世ロシアへの回帰をアピールしているだけでなく、内部を埋め尽くすモザイクも平面への回帰を示している。ルネサンス以降、西欧が3次元へ、つまり平面からの脱却を目指したことへのアンチ・テーゼであり、「西欧」を志向したペテルブルグにあって、2次元を異化した象徴的な建物だといえるだろう[4]。

述べたような街ゆえに、本誌「建築・美術週報」が産み落とされたのである。

## 4. 動乱期を反映する雑誌

冒頭で4頁の号もあると書いたが、第1次世界大戦の影響である。ロシアは7月31日に総動員令を発令したが、翌月中旬から雑誌は10週に渡り4頁の紙面構成が続く。12頁に戻るのは12月に入ってからである。第30号（10月22日発行）で編集部は、紙不足や同僚の出征等、困難な問題に直面し、規模の縮小は避けがたいが、刊行は継続する、今後は当初の分量を回復し、読者の期待に応えたいと書いている。

また、革命前夜の1917年になると4月以降第35号（終刊号）まで合併号が続く。第10～14合併号の冒頭でO.R. ムンツ（代表作、ヴォルホフ水力発電所）が、論文「自由の曙と永遠の芸術」で2月革命後に成立した臨時政府を支持しているが、「建築美術週報」は、10月革命と同時に終刊を迎えたのだった。

「建築とは、歴史や民族文化を映す鏡である」（ムラギルディン）といわれるが、本誌それ自体が帝政末期から社会主義革命に到る激動のロシアを映す資料として文化学的にも興味深い視点を提供している。

レニングラード包囲戦後の復興に本誌が果たした役割は少なくなかっただろう。ペテルブルクとペテルブルグっ子の結びつきの強さを垣間見る思いがする[5]。

### 注

小論執筆にあたり、T. Лаппа氏より注3）の資料提供を受けた。記して謝意を表す。

1） 1914年8月31日、ニコライ2世はドイツと敵対したため、ロシア風にペトログラードと改名したが、ここではペテルブルクを用いる。

2） ムラギルディン『ロシア建築案内』TOTO出版、2002年。

3） Петрова Л.И. Городской музей и власть. 1880-е - 1930-е годы. СПб. 2015.

4） 主に以下の文献を参照した。Города России: энциклопедия. Гл. ред. Г.М. Лаппо. М., 1994. Shvidkovsky D. St. Petersburg. Abbeville Press Publishers, 1996.

5） 筆者の関心は、文学都市テクストに描かれた都市と人間の関係にある（『散策探訪コロムナ　ペテルブルク文学の源流』未知谷）。今回貴重な一次資料を収蔵していただいたことに謝意を表するとともに、本資料が広く利用されることを願う。

（小論はJSPS科研費JP17K02631の助成を受けたものである。）

（こんどう　まさお　外国語学部教授）